View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

花森安治と北海道―開拓・棄民・国家

葛　西　弘　隆

プロでない私が言うんだから、あてになるのかならないのかわかりませんけど、政治の役割はふたつあります。一つは、国民を飢えさせないこと、安全な食べ物を食べさせること。もう一つは、これがもっとも大事です。絶対に戦争をしないこと。　菅原文太[1]

1.　はじめに

花森安治（1911-1978）は、1948年創刊の雑誌『暮しの手帖』の編集長として知られている。広告・宣伝から服飾デザイン、装釘（装幀）にいたるまでさまざまな分野で才能を発揮した花森は、なによりもまず、すぐれたジャーナリストであり社会批評家であった。彼は人びとの日常生活のミクロな現場から現代の政治社会にいたるまで、多種多様なテーマについて自ら取材し、ルポルタージュやエッセイとして発表した。興味ぶかいことに、彼は長年にわたり北海道に関心をもちつづけ、数々のエッセイで「開拓」を切り口に北海道の歴史と政治、文化について論じた。なぜ花森は北海道にこだわり、そこに何をみようとしたのだろうか。

この小稿では、花森安治の北海道論を政治思想史の視座から読むことをつうじて、開拓と棄民、近代国家の正統性と政治的主体性をめぐる思想について考察する。花森の「開拓者精神」へのまなざしは、たんに北海道論にとどまらず、自らの戦争体験やアメリカ合州国への関心とあわせて、現代日本社会を理解する道筋を照らしだし、「暮し」として知られる文化政治の言説戦略の重要な部分を構成していたと理解される。開拓、棄民、国家という問いの連関を意識しつつ、食べることをつうじた「見捨てられたもの（棄民）の主体性」の概念構制について検討することで、戦後日本の文化政治をめぐる語りの歴史化を試みることにしたい[2]。

2.「中途半端な町」―札幌ラーメンと植民地主義

意外なことに、花森安治の名前は札幌ラーメンを有名にした立役者として言及されることが多い[3]。花森は、東京帝国大学の新聞部（『帝国大学新聞』）時代の友人、扇谷正造が編集長をつとめる『週刊朝日』のルポルタージュで1950年代前半に札幌を取材し、「日本拝見その12 札幌――ラーメンの町」という記事を書いた。そこには「札幌の名物はラーメンである。鮭でもコンブでもない」と記されている[4]。これが評判をよび、『暮しの手帖』編集長で食文化に詳しい花森の「権威」が札幌名物のラーメンにお墨付きを与えたと宣伝されるようになったといわれる。ところが彼が書いた

1　2014年沖縄県知事選における俳優菅原文太の翁長雄志候補応援演説。下記の映像を参照。「11月1日、沖縄県知事選挙 1万人うまんちゅ大集会菅原文太氏のスペシャルゲストあいさつ」
https://www.youtube.com/watch?v=8PFTMiaHXAc（Last accessed on September 19, 2017）

2　本稿は2015年6月にカリフォルニア大学ロサンゼルス校で開催されたSecond Annual UCLA Trans-Pacific Workshopにおける報告（Hanamori Yasuji and Hokkaido: Subjectivity in the “Frontier”）をもとに執筆された。平野克弥氏に感謝したい。なお、戦前から戦後にまたがる花森安治の思想の変遷、『暮しの手帖』での取り組みについては、以下の拙稿を参照されたい。葛西弘隆「花森安治と戦後民主主義の文化政治」、『津田塾大学紀要』第50号、2018年。

3　速水健朗『ラーメンと愛国』（講談社現代新書、2011年）。

記事を読んでみると、花森が札幌をラーメンの本場だと言いたかったわけでも、札幌観光を宣伝するためにラーメンをもちあげたわけでもなかったことは明らかである。彼は、『週刊朝日』の記事の趣旨に反して自分の名前が利用されたことにとまどい、のちに『暮しの手帖』の短い記事のなかで、花森らしく、語呂あそびをまじえて次のように述べている。

> 札幌の町を、外国でなし、日本でなし、なにか中途半端な町だとおもったのだから、おもった通り、そう書けばよかったのだ。……いまからおもうと、「札幌に名物はない」と書けば、すんだことである。……その二十年のあいだに、いつとはなく、ラーメンは札幌が本場みたいなことになってしまった。めんくらったのは、当のラーメンと、このぼくだろう[5]。

花森は札幌ラーメンを、外国でもなく日本でもない「中途半端」な都市、札幌を象徴するものとしてとらえた。つまり、ジャーナリスト花森の関心の中心にあったのは、当時の札幌にみられる北海道の人びとの暮らしであり、その背後にある社会構造だった。ラーメンはあくまでその特徴をあらわすレトリックにすぎなかった。「日本みたいに、なにかといえば伝統伝統とカビくさい空気を必要以上にありがたがり、へんに斜陽めいた『名門』意識をひけらかす国に住んでいるとこの札幌みたいな、サバサバしたガラッ八の町は、ひどく素直で明るいのである。魅力はこれだろう。腹を立てながらも、何かと住みやすそうな感じがするのである」[6]。けれどもその内実は、札幌ラーメンがそうであるように、「日本の生そばの、あの伝統風味は、もちろんあろう筈はないが、さりとて、マカロニ、スパゲッティのような、本物のハイカラさからもほど遠い。なにか安手の異国ふうにみえて、実は日本製そのもの」だという。では、内地にはない異国情緒をうりにしながら「本物」がない札幌の「中途半端」とは、いったい何を意味したのだろうか。

北海道の玄関口にあたり、19世紀後半の開港以来栄えていた函館や、戦前の北海道経済の中心だった小樽にかわって、戦後の札幌は、従来からの行政にくわえて北海道経済・商業の中心都市の地位を確立した[7]。官公庁や東京や大阪に本社・本店をもつ大企業が札幌に出先機関や支社・支店を置き、内地から数多くのサラリーマンが赴任してくるようになった。花森は、この「ベルトコンベア」の仕組みが北の都、札幌のありかたの中心をなしているとみた。札幌に駐在する内地からの転勤族は、サラリーマン出世コースの階段のひとつとして、いわば「出かせぎ」として短期間滞在しているにすぎず、北海道や札幌への愛着をもたない。彼らにとって札幌はキャリアにとって次に移るまでの「待合室」や「仮りの宿」であり、その生活は「間に合わせ」で「その日暮らし」だった。そうしたサラリーマンは、地方の現実にも自らの生活にも関心などもたず、せいぜい「『小生儀在任中は大過なく』勤め上げて、東京転勤を待ちこがれている連中」だと、皮肉をこめて描写する[8]。

花森が札幌の人々の暮らしに発見したもうひとつの特徴は、「[暖房用の] 石炭を買うことと、それを焚くことで、一年を暮している」ことにあった[9]。冷涼な気候にもかからわず、それに見合った住居や暖房設備をもたず、改良することもせずに、隙間だらけの古い建物に旧式の暖房をそ

---

4 花森安治「日本拝見その 12 札幌――ラーメンの町」(以下「札幌」と略記)、『週刊朝日』1954 年 1 月 17 日号、28-34 頁。この記事の翌年には『暮しの手帖』の料理記事で札幌のラーメン店「三平」の大宮守人を取材し、レシピを紹介した。記事の冒頭に以下のような一節がある。「おぼつかない素人の包丁の筈でありながら、しかも、たべて、これくらいうまいラーメンは、よそにはない。ふしぎである……いちど作ってごらんなさい。どういう味か、およその見当はおつきになる筈だし、病みつきになる人もある筈である」(「札幌のラーメン」、『暮しの手帖』32 号、1955 年、59 頁)。また、後で検討する 1965 年の札幌・北海道論「雪と土と星の町」にも以下の記述がある。「この町の人はやたらにラーメンを食うし、店もやたらに多い。……『ラーメンの町』といわれてから、一躍有名になった感じだが、味については諸舌紛々」(花森「雪と土と星の町――日本紀行 その 3 札幌」、『暮しの手帖』73 号、1965 年、21 頁)。

5 花森安治「総理大臣のネクタイ」、『暮しの手帖』第 2 世紀 18 号、1972 年、113-4 頁。

6 花森「札幌」、29 頁。

7 戦前の帝国支配における小樽の地政学的位置と戦後の転換については以下参照。姜尚中・吉見俊哉『グローバル化の遠近法――新しい公共空間を求めて』(岩波書店、2001 年)、第 3 章。

8 花森「札幌」、29 頁。

9 同前。

のまま使って生活している。「ストーブが真っ赤になるほど石炭をたきながら、その住んでいる家ときたら、ごく粗末なバラックである。……まるで、一冬か、せいぜい二冬過すような、ひどい「間に合わせ」方で、しかも実際はそこに何十年も住んで、石炭代でヘトヘトになっているのである」。東洋のパリとうたわれる街は、暖房のために石炭を焚いたススで道路さえも灰色に汚れていると指摘する。こうした札幌の暮らしのありようは、日々の生活をよりよくすることへの意識や意欲を欠いていると観察された。結局のところ、明治以降の移住開拓によりつくられた札幌、そして北海道の人びとは、歴史のしがらみにとらわれず自由意識がつよいいっぽうで、ローカルな現場に足場を築いて自己の伝統を創りだすことができない、一言でいえば主体性に欠けていると評価された。

花森は、「中途半端」で「その日暮らし」という札幌の人びとの生きかたが、よりおおきく北海道の社会構造にもかかわっていると理解した。北海道でとれる良質の産品は地元で消費されずに東京や大阪に運ばれ、「北海道産」としてブランド化されるいっぽうで、道民は北海道価格とよばれるあからさまに割高な値札にもかかわらず、内地産の商品をありがたがって買い求める。「東京の町にアメリカの品物があふれているように、札幌には『内地の品』があふれている」[10]。それは北海道産のものが限られるからだけでなく、札幌の人びとが「『内地産』でなければ承知しないため」だという。そのため、北海道には「地元の企業が育た」ず、「内地のいいカモ」であると指摘する。「あくせくと働いては、その金を、すっかり内地にまき上げられているのだから、人口だけは多くても、これはやせるばかりだろう」。

その結果、人びとの主体性を欠いた都市、札幌には、本当の名物や個性がない。「いきおい、名物はラーメンということになってしまう。うまいから、というのではない、やたらに数が多いのである」。ところがその趣旨が抜け落ちて、ラーメンに言及した箇所だけが横領されたというのである。花森が札幌ラーメンの丼の底に見たのは、内地と外地、東京と札幌のあいだにはたらく不均等な権力関係であり、そこに描き出されていたのは、「東洋のパリ」と宣伝される札幌がじつは内地・東京に収奪される植民地都市だという事実だった。

もちろん、戦後北海道の植民地主義をめぐる認識は、なにも花森の独創ではない。北海道の植民地主義を論じた戦後日本の知識人はけっしてすくなくない。たとえば人類学者の梅棹忠夫は、1960年に『中央公論』に「北海道独立論」という長編の論文を発表した。梅棹は、近現代の北海道を一貫して「植民地」と解釈し、国民国家日本からの政治的独立の可能性を政治と文化の両面から論じた[11]。「札幌――ラーメンの町」での花森の北海道観は、数年後に出版されるこの梅棹の北海道論と基本的な視座を共有している。ただし、花森にしても梅棹にしても、彼らの関心の対象は北海道に限られるものではなく、むしろその視線の先には「内地」もしくは日本社会全体が据えられていたというべきだろう。彼らは北海道を語ることをつうじて、「内地」、さらに現代日本の政治・社会・文化について、明示的あるいは暗示的に論じようとしていたと考えられる。次に、花森の近代北海道観のより大きな見取り図を手がかりとして、この点を検討することにしよう。

3. 「開拓者精神」――北海道の近代

花森は、高度経済成長の只中にあたる1964年から1965年にかけて、北海道を題材とするふたつのエッセイ、「雪と土と星の町――日本紀行 その3 札幌」と「塩鮭の歌」を『暮しの手帖』に発表した[12]。ここではとくに、前者に注目することに

10　同前、30頁。

11　梅棹忠夫「北海道独立論――根釧原野」、『中央公論』1960年5月号、以下に収録。梅棹「北海道独立論」、『梅棹忠夫著作集』第7巻（中央公論社、1990年）。梅棹の北海道論と戦後日本の植民地主義をめぐる問題については、以下の拙論を参照されたい。葛西弘隆「戦後日本の植民地主義と文明論――梅棹忠夫の『北海道独立論』」、『国際関係学研究』第43号（津田塾大学、2017年）、15-28頁。

12　花森安治「雪と土と星の町――日本紀行 その3 札幌」、『暮しの手帖』73号、1965年、8-31頁。花森安治「塩鮭の歌」、『暮しの手帖』77号、1964年。どちらも花森が1970年に出した自選エッセイ集に収録された。花森安治『一銭五厘の旗』（暮しの手帖社、1970年）。なお、『暮しの手帖』に掲載された花森の文章には、改行を多用する、句読点を用いない、フレーズとフレーズの間に全角スペースを入れるなど、独特のレイアウトが用いられているものが多い。引用としての読みやすさを優先し、改行をつなげ、全角スペースを削除するなど適宜変更を施した。

しよう。この長編で花森は、近代北海道史を振り返って北海道の「開拓者精神」とよぶものの誕生と展開、喪失にいたる過程を検証し、その再生の可能性を説く。

花森はまず、札幌が内地の都市とは異なり、19世紀後半に明治新政府の開拓政策によって人工的に創りだされた都市であることに注目する。近代都市の歴史的起点は、以下のような情感にみちた記述によって描き出される。

> 《開拓使の》旗は、白地に星である。星は北極星を意味した。星は希望をあらわした。それは、人類の＜理想＞であった。＜乾いた河・サッポロ＞の原野に鉛色の空がかぶさっていた。その痛烈骨をさす空と土をつらぬいて、いま、一点の理想を掲げたその旗は、ちぎれんばかりに朔風に鳴っていた。風に鳴るその音は、古い国、古いしきたりに別れ、ここに新しい土地、新しい理想の町の誕生を告げる、爽快なファンファーレだったのである[13]。

この一節からは、花森が「開拓」にある種のロマンを感じており、それを肯定的に評価していることがわかる。ここでのロマンとは、自らの手で秩序をつくりあげる人間の意欲のありようのことといえる。彼は、明治初期からの開拓政策について、アメリカ合州国の西部開拓史と比較し、北海道開拓が「官製」の、つまり東京主導の政策として展開したと述べる。そのうえで、そうした「上から」の施策にもかかわらず、現場においては、ふかい知識や高度な技術の探究、そして当事者たちの夢と情熱に支えられた社会的ビジョンがあったことを、花森はたかく評価する。クラーク博士（William Smith Clark）の有名な“Boys be ambitious!”や、「塩鮭の歌」では水産加工（罐詰）技師のユリシーズ・S・トリート（Ulysses S. Treat）をとりあげ、「いったい、政治というものは、目のさきのことと、何十年もさきのこととを、一緒に見ていなければならないものだが、その何十年もさきを見ていた人間が、明治のはじめ、あの開拓使庁のなかにいた」と評価する[14]。開拓使の旗は、人びとが新たな空と土のもとで新たな共同体を設立し、秩序を構築する意欲をあらわす、輝かしい象徴として理解されている。

しかし、わずか10年ほど後の1882年までに明治政府主導の北海道開拓は頓挫し、開拓使は解散する。花森は、それが近代国家日本の帝国化の過程と深く関係していたことを指摘する。

> カネばかりかかって、すぐに実効のともなわない北海道開拓にみきりをつけたくなるわけである。おなじ新しい土地なら、そんな条件のわるい泥炭地帯を苦労してひらくより、よく気をつけてみると、すぐそこに朝鮮があり、台湾があり、満洲があり、支那があった。南方にも、いくらでも島があった[15]。

ここで興味ぶかいことに、花森は東京の政府から「見切りをつけ」られたことを、終わりとしてでなく、むしろ北海道にとって重要な、新たな出発点として理解している。早々に明治国家から見捨てられたからこそ、真の開拓がはじまったとみるのである。彼は「真の開拓」への人びとの熱意のことを「開拓者精神」（フロンティア・スピリット）とよんだ。初期の札幌農学校でクラークに学び、留学から帰国した農学者の佐藤昌介は、開拓・植民政策の見直しで農学校を廃止する道庁の方針に反発し、高等教育の意義を説いた。それは次のように描写される。「生命をかけて、農学校をつぶしてはならぬ、つぶせば、北海道は暗黒になると、烈々の信念で迫った。佐藤は農学校を存続せよ、といったのではない。農学校を拡張せよ、と主張したのである。……クラークの点じた小さな火は、すさまじい焔となって、初代北海道庁岩村通俊の心の中のうずたかい肺の奥にある、かすかに残っていた火にまた生命を与えた」[16]。事実、札幌農学校は廃止されることなく北海道帝国大学へと改組され、佐藤は初代総長となる。花森は、こうした行動を支えたのが「理想をつらぬ」く開拓者精神だとたかく評価する。

花森によれば、以後の近代北海道史で、その開拓者精神は著名な政治家や知識人ではなく、市井

---

13 花森「雪と土と星の町」、8頁。
14 花森「塩鮭の歌」、18頁。
15 花森「雪と土と星の町」、13頁。
16 同前、19頁。

の無名の人びとの努力のうちに引き継がれていった。彼は道内で商売をはじめ成功を収めた事業家たち――今井百貨店、中ウロコ呉服店、福山醸造、雪印乳業――に注目し、創業者の経歴や思想、経営方針を紹介した。そこで花森が重視するのは、「政府の力でもなければ、道庁の力でもない、北海道をいいカモにした内地の大資本の力でもなかった。名もなく、権力もなく、財力もないこうした人たちの根性である」。開拓者精神とは、その「根性」のこととされる。「この人たちには、仕事はちがい、言葉はちがっていても、その底に共通した、ひとつの精神があった。それは、クラークがいった、あのみじかい言葉に流れていたものと、同じものであった。それは、開拓使本庁の八角塔の上で風に鳴っていた、あの旗の指さしたものと、同じものであった」[17]。こうして、初期の開拓政策の後、内地の政府は「一ども、北海道など、ふりむくことをしなかった」いっぽうで、「中央政府に捨てられた」札幌の、北海道の人びとが、自らの手で歴史を創造した努力を開拓者精神の概念によって特徴づけた。

しかし、第二次世界大戦での日本の敗戦と帝国の解体は、北海道の地政的価値と政治経済的条件におおきな変化をもたらした。敗戦直後の1945年11月には「緊急開拓事業実施要領」が閣議決定されて戦後開拓がはじまり、1950年には北海道開発法が制定された。同法のもとで北海道開発庁と北海道開発局が設立され、政府主導の「北海道総合開発計画」が長期にわたり展開することになる。それは開発という名の、新たな「上から」の開拓であり、植民地北海道の戦後における再発見であった。

> 八十年目に、また、官製おしきせの開拓が、はじまったのである。兆というケタの金が投入されはじめたのである。終戦になって、日本は、朝鮮を失い、台湾を失い、満州を失い、南方の諸島を失い、樺太を失った。茫然としているとき、気がついてみたら、北海道が残っていた、というわけである。八十年前、捨てられた北海道は、栄養失調ではあったが、とにかく育ってはいた。それっとばかり、開拓は開発と名をかえて、再開された。金が動くところ、人が動き、ビルが林立する[18]。

冒頭に引いた1950年代の札幌論と同じく、1960年代中頃のこのエッセイでも、花森は戦後の北海道については批判的な記述に終始する。敗戦直後の内地主導の開拓・開発を、「東京と札幌のあいだに、目に見えないベルトコンベアーができ、……ベルトコンベアーにのって金が、仕事が、人が、東京から札幌へ流れてゆく」と指摘する[19]。「＜札幌行＞という荷札は、そのまま裏返すと＜東京行＞である。東京の流行は、仙台、青森をとびこして、いきなりこの町にやってくる。パリの流行が、印度や中国をとびこして、いきなり東京にやってくるのと似ている」。そのため、現代の北海道は「よそもの天国」になったという。「みんな、東京のほうを向いて暮している。その東京で、外国製というと、なんでもありがたがられているように、札幌では、商品はもとより、政治も行政も、商売のやり方も、みんな＜メイド・イン・トウキョウ＞が巾をきかしている」[20]。

明治初期に東京の政府から切り捨てられたことを契機として戦前の北海道の人びとののなかに育まれた「真の開拓者精神」は、戦後にこうして失われてしまった。「明治初年、開拓使の仕事には、ことごとく壮大な夢と、たぎる情熱があった」。けれども「いま、花々しいかけ声で、開拓が再開されているが、そこには、一片の夢も、ひとかけらの情熱もない」と花森は断じる。夢と情熱を失った現代北海道のありようは、すでに1950年代に花森が観察していたものでもあった。ただしその原因は、戦後の発展が内地主導の「上から」の開発だったことのみによるのでない。「開拓といい、開発という。それがおしきせであり、官製だからといって、責めるのは、あたらないだろう。九十年まえ、この原野に、はじめて町を作ったのは、政府の開拓使である。この開拓事業がなかったら、当時としては、どうにもならなかったにちがいな

17　同前、24頁。

18　同前、26頁。戦後北海道開発史については前掲の拙稿を参照されたい。葛西「戦後日本の植民地主義と文明論――梅棹忠夫の『北海道独立論』」。

19　同前、27頁。

20　同前、28頁。

い。いまもおなじである。ひとはすくなく地力は貧しい。大きな資本と、つよい力がなければどうにもならない。しかし、兆のケタの予算を投入したらそれで、開発はできるのだろうか」[21]。花森は、むしろこの過程をつうじて、北海道の人びとの主体性そのものが失われてしまったことを問題化した。内地への従属をつうじて、秩序を自らの手で作り出す北海道の理想を人びとは忘れてしまったというのである。「雪と土と星の町」の末尾で花森は、街中が煙でけぶり企業のネオンサインが輝く札幌中心部の全面写真を数ページにわたって配し、情感溢れる筆致で、開拓者精神を忘れた北海道の人びとに訴えかける。

> この町は、歌うことをやめた。旗音はやんだ。理想の星は消えた。……かつて、若い情熱をたぎらせ、新芽を空にのばしたポプラ並木は、枯死寸前、観光客の失笑の前に、老残の身をさらしている。これが、札幌なのか。これが、かつて新しい町づくりの夢を託した札幌なのか。＜理想＞という言葉は、色あせ、汚れ、たれもかえりみなくなった。＜理想＞なき人間が、したり顔で国つくりをいい、人つくりを説いている。そして、札幌は、いま泥まみれの盛装に飾られ、花やかな挽歌につつまれて、東京のご都合主義の指さす道を、歩こうとしているのだ。札幌よ。その鉛色の空とビルの上に、いま一たび、新しき旗をかかげ、りんれつと寒風に鳴らしめよ。札幌よ。いま一たび、ここにかがやかしき星をかかげりょうりょうと北風に歌わしめよ。老人すでに黙すとあらば、若き者たて。男子すでに志を失うとあらば女子立て。立って、日本にただひとつ、ここに、理想の町づくりはじまると世界に告げよ。Boys and Girls, Be Ambitious![22]

ひとことでいえば、「開拓者精神ふたたび」ということになるだろう。Boys and Girlsと女性への期待を強調するところは花森らしい。札幌、そして北海道には、開拓者精神という、理想の町づくりへの夢と情熱を取りもどすこと、そして内地から自立することが求められる。それが花森の現代北海道論の結論だった。

ところで、花森のこのような札幌=北海道観には、北海道の近代が初発から内包する先住民への差別と暴力の契機への視座が欠けていることは指摘しておかねばならない。もっとも、ほぼ同時期に書かれた「塩鮭の歌」では和人のアイヌにたいする扱いに言及し、次のように記している。

> わるがしこい和人が北海道へ入ってきて、アイヌに漁法を教え、奴隷のようにこき使って、鮭漁をはじめた。相手は正直で疑うことを知らぬアイヌであり、こちらはそろばん片手に抜け目のない和人である。そんなとき、世界のどこにでも行われたことが、ここでも行われたにすぎないのだ、といってしまえば、それまでのことかもしれない。しかし、そのころの記録の断片をひろい読みしただけでも、松前藩をはじめ、それを利用して、もうけだけに血道をあげた連中のやり方には、おなじ日本人として、顔から火の出るような恥ずかしさと、激しい憤りを感じないわけにはゆかないだろう[23]。

怒りのこめてアイヌ勘定を批判するこの一節は、花森がもちろん蝦夷地と先住民の歴史に無知だったわけでないことをしめしている。『暮しの手帖』でも、1950年代前半にアイヌのデザインをとりあげて記事にしている[24]。けれども、彼の北海道論とその歴史観では、こうした歴史的過去の暴力の延長線上に明治期以降の開拓――彼が理想の町づくりへの夢と情熱として理解するもの――があ

---

21 同前、29頁。

22 同前、30-31頁。「開拓使の旗」や「新しき旗」、その「旗音」についての記述からは、「旗」というシンボルのイデオロギー機能を重視する花森の発想を読みとることができる。「雪と土と星の町」から数年後、花森は「見よぼくら一銭五厘の旗」を発表した。花森の代表的な作品として知られるこのエッセイは、現代日本の政治と経済を痛烈に批判し、継ぎはぎのボロ布でつくった「こじき旗」を掲げて、庶民（ぼくら）の民主主義を宣言する。

23 花森「塩鮭の歌」13-14頁。

24 河野広道「アイヌの文様」、『暮しの手帖』21号、1953年、84-92頁。この記事の著者、河野広道は、昆虫学・考古学者で、北海道史の基礎を確立した河野常吉の息子にあたる。彼は戦時中に「北方文化論」を主導し、敗戦後の1946年には「北海道自由国論」を発表した。河野広道「北海道自由国論」、河野『続北方文化論 河野広道著作集II』（北海道出版企画センター、1972年）。

るという論点、すなわち和人による開拓と先住民の「棄民化」――忘れ去られること――とがじつはコインの表裏のようにひとつのものだったという論点が浮かびあがってこない。新たな政治共同体秩序の構築とそれを支えたとされる「開拓者精神」が同時に始源の暴力としてもはたらくということへの視座が、花森の議論からは出てこないのである。そのかわりに蝦夷地・北海道が無主の地として想定され、その前提のもとで、自らの主体的参与により共同体を設立する努力が、開拓使の旗というシンボルや開拓者精神の概念をつうじて理想化されることになる。

そして花森のこのエッセイから浮かびあがってくるもうひとつのこととして、彼の札幌=北海道論はじつは現代日本社会論でもあるという論点を挙げるべきだろう。札幌が振り回されているのは、じつは東京の「ご都合主義」のせいである。その意味で彼が批判する札幌の姿は、じつは東京の映し鏡であり、北海道を論じることは内地と日本社会全体を批評することでもあった。たとえば、「外」からやってくるものを何でもありがたがる態度は札幌に限ったことではなく、花森が東京の人びとの欧米へのあこがれを皮肉をこめて指摘するように、戦後日本の消費経済や社会意識の一部でもあった。花森の北海道論は札幌／東京、北海道／内地、日本／アメリカという複数の地政的位相の組み合わせから成り立っており、主体性の欠如という札幌の人びとにたいする批判は、ブーメランのように東京にも跳ね返ってくる。札幌を東京に置き換えて読むとき、アメリカ合州国をはじめとする「外国」との対比をつうじて、現代日本社会に生きる人びとの主体性（花森のいう夢、理想と情熱）を欠いた姿が透けてみえるように議論が組み立てられている。この意味において、花森の北海道論は現代日本社会論として書かれているのである。

では、現代日本になぜ「開拓者精神」が求められるのだろうか。なぜ1960年代の花森はそれを主題化したのだろうか。詳細な検討にすすむ前に、花森の「開拓者精神」の概念に関連するもうひとつの論点を整理しておきたい。

4.　合州国開拓史へのまなざしと戦争の記憶

花森は北海道をアメリカ合州国の歴史、とくに西部開拓史との類推で理解していた点を指摘しておくことは重要である。花森は合州国の西部開拓史に登場する人間模様に興味をもち、エッセイ「雪と土と星の町」の発表と前後してアメリカ合州国の近代史にも取り組んでいた。たとえば、彼は1965年に公開された映画「西部開拓史」（“How the West was Won”）を観て「この大仕掛けな見世物映画にひどく感動」したと語り、物語の筋をたどりつつその感動を記す長編のエッセイ「はるかかなたには――リリスプレスコット伝」を『暮しの手帖』に掲載した[25]。また、ルイ・ラムーア『おゝフロンティア――西部開拓史物語』の邦訳を、自ら装幀を手がけて暮しの手帖社から刊行した[26]。これらの取り組みに一貫しているのは、自然環境や歴史の激動に翻弄されながらもつよい意志をもって生きる人びと、とくに女性への共感であり、別の表現でいうならば、「無主の地」における人間の生への意志としての開拓者精神への賛辞であった。『おゝフロンティア』に寄せられたリード文は、その内容と文体から花森の筆によるものと推測される。

開拓者精神（フロンティア・スピリット）――
それは　きらびやかな客間でもてあそばれる
言葉でもなければ
演壇で　したり顔して
投げ交わされる言葉でもなかった
あの荒涼たる西部の
草原と山脈と濁流のなかに生きた
数多くの農夫と山師といかさま師と家畜屋と
天幕小屋の踊り子と歌い手と
列車強盗と騎兵隊員と牧童と
幌馬車隊長と保安官と無法者と
そのすべての心の底を
ひびきをたてて流れていたもの
それが＜開拓者精神＞なのだ[27]

25　花森安治「はるかかなたには――リリスプレスコット伝」、『暮しの手帖』69号、1963年、119頁。

26　ルイ・ラムーア『おゝフロンティア――西部開拓史物語』大門一男訳（暮しの手帖社、1965年）。他にアメリカ合州国を扱った作品としては、1961年度ピューリツァー賞を受賞し、映画化された『アラバマ物語』の翻訳が『暮しの手帖』に連載され、後に単行本として出版された。ハーパー・リー『アラバマ物語』菊池重三郎訳（暮しの手帖社、1965年）。

27　ラムーア『おゝフロンティア』、表紙裏。

ここに記される開拓者精神の記述が、言及される出来事こそ異なるとはいえ、先に検討した「雪と土と星の町」の開拓者精神と似ていることは、あらためて指摘するまでもないだろう。それにしても、花森はなぜそれほどまでに合州国開拓史に惹かれたのだろうか。「はるかかなたには」には、直面する新たな困難のなかで主人公リリスが口ずさむ16世紀イングランドの歌の一節がくりかえし引用されており、エッセイの題名もそこから取られている。「はるかなる　かなたには　野はひらけ　風わたる　新しき空よ土よ　これぞふたりのくに……」[28]。北海道近代史の場合と同じように、合州国西部開拓史の語りにおいても、新たな土地に自らの力で町をつくり共同体をつくること、別言すれば、政治社会秩序設立への関心が中心にあった。そして合州国史についても、花森には開拓と植民地化が一体のものであったという視点、開拓が同時に先住民の差別や排除、虐殺と一体のものであったという視点が欠けており、あたかも誰もいない土地をはじめて切り開き、自らのものとしたように読める。歴史認識におけるこうした問題をはらみつつ、花森の視線は社会秩序の構築や政治共同体の設立へとむかう。政治共同体はアプリオリに存在するのではなく、あくまで人びとの必要に応じて制作される人工物である。北海道の場合でも、アメリカ合州国の西部開拓史の場合でも、花森の関心の中心にあったのは、人びとが自らの努力により生活を築き、政治共同体の秩序が制作されるプロセスだった。「はるかかなたには」の場合は、カリフォルニアをめざす「移動する共和国」としてのそれである。

> この共和国では、法律は、だれかが作ったものではなかったのである。自分たちがみんなうまくゆくように、みんなで作ったのである。税金も、同じだった。もちろん、ぼくらの国でも、そういうことで作られていることは知っている。しかしそれは、学校で習ったり、新聞で読んだりして、アタマで知っているだけである。……あの大きなアメリカという国は、この小さな、一つずつの共和国の、ドタン場ギリギリの必死のチエと根性の上に、やがて出来上がっていったのではないだろうか[29]。

政治共同体の正統性に関連して、ここでもうひとつ興味深い点を指摘しておきたい。北海道や合州国の開拓を主題とする花森のエッセイには、しばしば戦中戦後の自分の経験についての記述が挿入されている。議論や物語の進行からすると唐突で、余談のようでありながら、注意ぶかく読むと、「フロンティア」を論じる花森の関心の底流に自らの戦争経験があることがわかってくる。開拓史への関心は、じつは戦争、そしてその主体としての近代国家・政府への根源的な懐疑へと接続していた。

花森が、初期の『暮しの手帖』では政治社会問題を前面に押し出して論じることがなかったのにたいして、1960年代以降次第にきびしい舌鋒で現代日本国家を批判するようになったことは知られている。その背景には、一兵卒として召集された戦時中の経験、そして戦後の混乱の記憶があった[30]。北海道や合州国について語る花森の関心にも、同じ意識がはたらいていたといえよう。たとえば「はるかかなたには」では、物語の筋道を追う記述のなかに、戦時中に満州・ソ連国境の山脈地帯を日夜を問わず歩きとおしたときに日記をつけていた記憶や、敗戦直後の食糧難の経験の記述が差し挟まれている。

> 政府なんて、なんの役にも立たなかった。しかし、デモ行進などやっている余裕もなかった。ギロンしているひまに、家族の今夜の、あすの食べる分を工面しなければならなかったのである。……終戦直後、ぼくたちの飢え死にを救ったのは政府でも代議士でも役人でもなかった。この機関車にすずなりになった異様な写真を見たまえ。ぼくらを飢え死にから救ったのは、この人たちぼくらの母や妻や娘や姉や妹

---

28 花森「はるかかなたには」、110、112、119頁。

29 同前、110頁。

30 1960年代後半になると『暮しの手帖』も戦争の経験と記憶をめぐる主題をとりあげるようになった。1968年の第96号は一冊すべてを特集「戦争中の暮しの記録」にあて、後にハードカバーの単行本『戦争中の暮しの記録』保存版が出版された。1960年代以降の花森の戦争と政治にかかわる主題の前景化については、前掲の拙稿を参照されたい。葛西「花森安治と戦後日本の文化政治」。

だったのだ[31]。

戦争と軍隊は平時の秩序を無効にし、戦後は混乱のなかで政府は機能していなかった。花森は、政治共同体が実効的に機能しない状況に生きることを、食べるという人間の根源的な必要に焦点をあてて論じる。経験にもとづいて導き出された花森の判断は、いざというときに政府と男は役にたたないというものだった。このようにして、北海道と合州国西部への関心をとおして立ち現れてくるのは、近代的国民共同体への懐疑であり、「男らしさ」など無能という認識にほかならなかった。

「われわれの政治共同体」はいかにつくられるべきなのか、それは何をすべきであり、なにをすべきでないのか。政治思想史における社会契約論の前提にかかわる議論を、花森はジャーナリストとして展開した。彼の「開拓者精神」が、政府に見捨てられた地点から始まると考えられているのは、そのためである。そして、人間存在のもっとも根幹にかかわる、食べることの具体性から、国民という政治共同体の可能性と限界を照らしだそうとした。

5.　胃袋社会契約論

棄民との関連で政治共同体の正統性を問う発想は、1969年のエッセイ「国をまもるということ」においても顕著にあらわれている。新日米安全保障条約をめぐる当時の政治状況のもとで個人と国家の関係を問い直すこのエッセイは、小樽に住む老婦から花森が聞いた経験談からはじまる。

第二次世界大戦の敗戦直後、当時まだ食糧を自給できなかった北海道は極度の食糧不足に陥っていた。「来る月も来る月も、一粒の米も配給されなかった。明けても暮れても、じゃがいもばかり食ってしのぐ日日がつづいた。内地に見捨てられたとおもった」[32]。「頭の頂きから足の爪先きまで、その［軍国主義］教育をたたきこまれて育ち、妻となり、母となった」彼女は、いま自分が国家の庇護を受けていないこと――棄民であること――を実感した。折しも連合国による分割占領の噂がとびかい、北海道はソ連領になるかもしれないと聞くなか、「米さえたらふくたべさせてくれるのなら、露スケであろうとどこの国であろうとかまやしない」と思った。「いくら内地だって苦しいといっても、北海道が飢えているのを知らない筈はありません。それを一粒の米も送ってよこさない。なんでそれが我々の祖国であるものですか。これをいうとき、その人の声は、おどろくほど真剣味をおびていた」。

ここでの花森の政治観は、胃袋社会契約論――社会契約の論理を胃袋で理解するとでもいえばよいだろうか。近代政治思想史の一般的な理解にしたがえば、17世紀以降に西ヨーロッパで定式化され、市民革命や近代国家成立の動きを支える思想となった社会契約論は、政治共同体を人民の生命と財産を守り、ひとがより平和的に生きることを可能にするための手段と定式化する。権力はそれを構成する人民の名において、この目的のために用いられるかぎりで正統化されるものとされた。言葉づかいこそ異なるものの、ジャーナリスト花森は同じ問題を提起している。小樽の主婦の経験談に彼が見いだしたポイントは、実質的に政府が機能しない状況で人が生きる可能性についての洞察であった。政治共同体のもっとも基本的な役割は生存の保証にあり、その役割を放棄した政府には正統性がないこと、忠誠の対象としての価値がないことを示唆するエピソードを、愛国心や安全保障にかかわる議論の冒頭に置いたのである。そして花森は、この主婦がそのときロシアに占領されてもよいと思ったという事実を重視する。花森の筋道にしたがうなら、戦後北海道の開拓=開発は、この食糧難による二度目の＜棄民＞を経て始まったのだった。

そして、この「国をまもるということ」にも合州国西部開拓史への言及がある。その要点は、やはり政治共同体の制作と正統性をめぐる問いだった。西部劇に出てくる無法状態から政治共同体樹立への移行を説明したうえで、「＜くに＞というものは、そこに住んでいる人間にとって、なにかと役に立ってくれなければ、たいした意味はなくなる」とまとめる[33]。こうして敗戦直後の北海道の食糧難の経験、そして合州国西部開拓史の理解からは、現代日本国家の正統性への懐疑が引き出

31　同前、113頁。
32　花森安治「国をまもるということ」、『暮しの手帖』第2世紀2号、1969年、104頁。
33　同前、106頁。

されることになる。それはまた、安保問題にゆれていた1969年の日本政治への批判であり、戦争を忘却して愛国心を喚起する政治家たちの発想への介入であった。花森は、社会契約論的な発想から、政府と国民の関係を貸し借りとしてとらえる。そしてアジア・太平洋戦争で「国民が＜くに＞に＜貸した＞」、つまり国民が多くの犠牲を払ったにもかかわらず、戦後の日本政府は彼らにたいしていまだにその借りを返していないと批判する。花森の疑問の核心にあるのは、いま「ぼくたち」が帰属する国家は、はたして忠誠の対象になりうるのかという問いである。

> 日本という＜くに＞は、いま総生産世界第二位などと大きな顔をし、驚異の繁栄などといわれてやにさがり、そして、したり顔をして、みずから＜くに＞を守る気概を持て、などと叱りはじめている。……よっぽど、この日本という＜くに＞は、厚かましい＜くに＞である。いつでも、どこでも、＜くに＞を守れといって、生命財産をなげうってまで守らされるのは、日ごろ＜くに＞から、ろくになんにもしてもらえない、ぼくたちである。こんどの戦争で、これだけひどい目にあいながら、また、祖国を愛せよ、＜くに＞を守れ、といわれて、その気になるだろうか[34]。

花森は、1971年の松田道雄との対談において、「ぼくは北海道に非常に興味があるんです」と切り出したうえで、上述の小樽の女性のエピソードにふれて、敗戦直後の北海道には無政府、無国籍の感情的基盤ができていたと指摘する。「『日本政府はなにもしてくれない』……ああいう、米が一粒もないというような状態に立たされると、国とは何だ、お上とは何だ、政府とは何だ、ということを、学のないおばちゃん連が本気で考えたとおもうんですね。その結論が、あさはかといわれても、米くれるならソ連につく、ロスケにつくという、これがぼくは本当の問題じゃないかとおもうんですよ」[35]。

対談のこの箇所には、「暮していけなくて食っていけないとき愛国心とはなんだろう」という小見出しが付されている。花森は、胃袋と食にしめされる日常生活における必要には、抽象的なイデオロギーや主義にはない「強さ」があるとの信念をもっていた。ここには、食という、生存に直接つながる領域こそが政治的にもっともつよいという花森の信念がある。そして「じっさいの、暮していくという、生きていくということ、食わねば死ぬという、そういうところで、触発されてくるもの、そいつをやっぱり大事にしたいなあ」と語る。花森の主張は、日々の生活のミクロな具体性への連関を欠いたいかなるイデオロギーも、民主主義社会をつくりあげる基礎にはならず、政治社会を語る際に抽象的なイデオロギーの背後にしばしば追いやられて軽視されてきた、日常生活における衣食住の具体性こそが政治を構成する、というものだった。日常生活の具体性にどこまでもこだわるこの発想は、「暮し」という花森の思想の核をなすものであり、彼が編集する『暮しの手帖』にも一貫するものだった。松田との対談で花森は、小樽の主婦の思考を「無理クツ」、「非論理」とよぶ。

> むろん理論なんてないでしょう。しかしぼくは、どうも自分がそういうタチだから、理論でない方が強いようにおもうんですよ。理論には、反対の理論だとか、自分に都合のわるいことになってくると、パッと、いわゆる転向ということがあるでしょう。理クツでは完全にギューッといわされているのに、それじゃ「まいりました」といわない。「私はまだ負けていません」「こうやって立っています」という、いくら負けても、ふりかぶってくる感じね、このごろ、ぼくは、この力が次の時代の力になるという、そういう予感がありますね。というのは、この無理クツというか、非論理というか、それで押してくる、しかも、本当の筋は案外つかんでいるのですね。それをいわゆる、我我が習った論理学で処理しないだけで、これをバカにしていると、えらい目に合うんじゃないかという気がしますけどね。

一種のあまのじゃくというべきか、花森は論理や理論といった概念的思惟の位相に警戒を隠さず、

---

34 同前、107頁。

35 松田道雄、花森安治「医者と兵隊と戦争と保険と」、『暮しの手帖』第2世紀14号、1971年、196頁。

つねに批判的な態度をとる。にもかかわらず、問題にしているのは論理的思考の軽視や軽蔑ではなく、むしろ論理の「強度」(「本当の筋」) とでもいうべきものであり、その位相をむしろ重視している。花森は、頭でっかちのイデオロギーではなく、食のように日々の生活と身体の具体的な次元に基礎づけられた必要のみが、民主主義政治を可能にすると考えた。

同じ理由から、花森は1918年の米騒動にしばしば言及し、1972年にはエッセイ「内閣を倒した無学文盲の三人の女たち」を書いた。そこで花森は、この歴史的大事件を引き起こしたのが三人の「無学文盲」の女性たちの生存をかけた必要であったことを強調する。

> 女房一揆は、片カナ漢語の多い議論の末に決定された戦術でもなければ、中央からの指令で、組織を動員したデモでもなかった。……この一揆に加わった〈嬶さん〉たちは、おそらく、〈闘争〉という字も、〈搾取〉という字も、だれひとりとして、読むことも書くこともできなかっただろう。この女たちは〈アタマ〉で考えて、たたねばならぬと結論して、一揆に加わったのではなかった。女たちは、ながいあいだ、じっと歯をくいしばって、こらえてきた。女とは、こらえるものだ、と教えられてきた。こらえる限界はとっくにすぎていて、それでもこらえていた。……こらえて働いて、それで三度の粥をたく米さえ買えぬ、となって、女たちは起ち上がった[36]。

このように、近代史のさまざまな事例を題材にとりながら、花森は食べることの具体性に根ざした政治の重要性を説いた。とりわけこの時期に「胃袋社会契約論」を展開したのは、高度経済成長をつうじて物質的に豊かになりながらも、むしろ生存にかかわる政治の位相への理解や想像力が失われつつあると考えられたからではなかっただろうか。花森の北海道論、なかでも開拓者精神の称揚から、生存をふくめた日常生活の具体的な必要における「無理クツ」・「非論理」への着目へとつながる筋道は、この地点において、彼の代表的なエッセイのひとつとして今日まで読まれている「見よぼくら一銭五厘の旗」(1970年) に記される、人びとの心のなかに巣食う「ちょんまげ野郎」の精神、世界にたいする「うじゃじゃけた」態度への批判とストレートに接続している[37]。政府と大企業をコントロールする力を人びとがもたないとき、また人が自ら生きる可能性を想像し、創造する能力を失うとき、政治共同体に、そして人びと自身に何が起こるかという問い――あるいは危惧というべきだろう――が、この時期の花森の関心の底流をなしていたといえよう。

6. 棄民と生存の政治学のために

花森の北海道論は、近代国民国家とよばれる政治共同体の設立と展開を可能にする、人びとのエネルギー (夢と情熱、理想) への関心によって貫かれていた。開拓者精神の礼讃は、食べること、生きることのリアリティにむきあう必要と能力を語り、生存をめぐる政治の問題を提起する言説戦略の核心だった。それは、社会契約論的発想にもとづく自由主義的個人の概念をもとに、いかにして秩序が可能で、政治 (政府) は何のためにあるのかという問いをふくんでいた。

ジャーナリスト花森にとって、北海道を論じることは現代日本政治社会への批判的介入でもあった。自らの戦争体験を背景とした、開拓・棄民・国家という問題の系列は、戦後日本社会の進展、とくに高度経済成長がもたらす「豊かさ」のなかで社会的想像力が失われ政治的保守化と無関心がひろがっていく、1960年代以後の日本の人びとの生きかた (「暮し」) への批判として理解できる。よく知られているように、政治社会を論じる際、花森は「ぼくら」という主語を好んで用いた。彼の北海道論=現代日本社会論から浮かびあがってくるのは、その「ぼくら」が、現代日本の政治経済システムのなかで、すでに「棄民」になりつつあるのではないかという問いだったといえよう。その意味で「棄民」(見捨てられたもの) の主体性という問いは、ほぼ同時代の「見よぼくら一銭五厘の旗」にしめされることになる、日常生活の具体性に根ざした政治的抵抗をつうじて民主主義を (再) 構築しようとする花森の戦略とつながっていた。

晩年の花森は、棄民という問いが歴史的過去だ

---

36 花森安治「内閣を倒した無学文盲の三人の女たち」、『暮しの手帖』第2世紀19号、1972年、75頁。
37 花森安治「見よぼくら一銭五厘の旗」、『暮しの手帖』第2世紀8号、1970年、5頁。

けなく現代の問題でもある事実に、はっきりと気づいていた。しかしながら、そうした重要な示唆をふくんでいるいっぽうで、歴史認識としては、その「見捨てられたもの（棄民）の主体性」への関心――北海道についても、彼がしばしば参照する合州国西部開拓史の理解についても――が、自ら制作する政治共同体（「ぼくら」）が先住民への排除と差別の構造化のうえに成り立ってきたという問い（棄民化の重層構造）への視座を欠いていたことは否めない。

棄民という問いを、古典的リベラリズムとナショナリズムの中心にある近代的個人という花森の前提をこえる地点にまで拡張するとき、どのような政治社会批判と歴史記述が可能になるだろうか[38]。私たちは、戦後の国民国家日本が、沖縄や水俣をはじめ、さまざまな政治経済的要因から多くの棄民を生みだしてきたことを知っている。また、ポスト3.11の文脈ではフクシマ、ネオリベラリズムの文脈では地方や非正規労働の若者というように、現代の棄民というべき問題は、個人対国家という自由主義的前提をおおきく越えたかたちであらわれている[39]。新自由主義的グローバリゼーションと人種主義的ナショナリズムがひろがる2010年代の今日、棄民という問いはいかに設定しなおされ、理解されるべきだろうか。花森の北海道論は、「棄民の政治」をめぐる問いを理論化するうえで避けて通ることのできない問いとヒントを私たちに提示している。

【参照文献】

花森安治「日本拝見その 12 札幌――ラーメンの町」、『週刊朝日』1954 年 1 月 17 日号。

花森安治「はるかかなたには――リリスプレスコット伝」、『暮しの手帖』69 号、1963 年。

花森安治「雪と土と星の町――日本紀行 その 3 札幌」、『暮しの手帖』73 号、1965 年。

花森安治「塩鮭の歌」、『暮しの手帖』77 号、1964 年。

花森安治「国をまもるということ」、『暮しの手帖』第 2 世紀 2 号、1969 年。

花森安治『一銭五厘の旗』（暮しの手帖社、1970 年）。

花森安治「総理大臣のネクタイ」、『暮しの手帖』第 2 世紀 18 号、1972 年。

花森安治「内閣を倒した無学文盲の三人の女たち」、『暮しの手帖』第 2 世紀 19 号、1972 年。

速水健朗『ラーメンと愛国』（講談社現代新書、2011 年）。

姜尚中・吉見俊哉『グローバル化の遠近法――新しい公共空間を求めて』（岩波書店、2001 年）。

葛西弘隆「ナショナル・デモクラシーと主体性――丸山真男の民主主義論再考」、『思想』1999 年 2 月号。

葛西弘隆「戦後日本の植民地主義と文明論――梅棹忠夫の『北海道独立論』」、『国際関係学研究』第 43 号（津田塾大学、2017 年）。

葛西弘隆「花森安治と戦後日本の文化政治」、『津田塾大学紀要』第 50 号（津田塾大学、2018 年）。

河野広道「北海道自由国論」、河野『続北方文化論 河野広道著作集 II』（北海道出版企画センター、1972 年）

「札幌のラーメン」、『暮しの手帖』32 号（暮しの手帖社、1955 年）。

暮しの手帖編『保存版　戦争中の暮しの記録』（暮しの手帖社、1969 年）。

ルイ・ラムーア『おゝフロンティア――西部開拓史物語』大門一男訳（暮しの手帖社、1965 年）。

ハーパー・リー『アラバマ物語』菊池重三郎訳（暮しの手帖社、1965 年）。

松田道雄、花森安治「医者と兵隊と戦争と保険と」、『暮しの手帖』第 2 世紀 14 号、1971 年。

テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める――アイヌが経験する近代』（みすず書房、2000 年）

Saskia Sassen, *Expulsions: Brutality and Complexity in the Global Economy*, Harvard University Press, 2014.［サスキア・サッセン『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理――不可視化されゆく人々と空間』伊藤茂訳（明石書店、2017 年）］

梅棹忠夫「北海道独立論――根釧原野」、『中央公論』1960 年 5 月号、梅棹「北海道独立論」、『梅棹忠夫著作集』第 7 巻（中央公論社、1990 年）。

《website》

「11 月 1 日、沖縄県知事選挙　1 万人うまんちゅ大集会　菅原文太氏のスペシャルゲストあいさつ」（2014 年）https://www.youtube.com/watch?v=8PFTMiaHXAc（Last accessed on September 19, 2017）

38 北海道の近代に注目してこの問題を論じた現代の古典として以下参照。テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める――アイヌが経験する近代』（みすず書房、2000 年）。

39 この関心からの近年のグローバリゼーション研究として以下参照。Saskia Sassen, *Expulsions: Brutality and Complexity in the Global Economy*, Harvard University Press, 2014.［サスキア・サッセン『グローバル資本主義と〈放逐〉の論理――不可視化されゆく人々と空間』伊藤茂訳（明石書店、2017 年）］。この著作でサッセンは、本稿の「棄民」に相当する問題を「放逐」（expulsion）として概念化し、人間のみならず自然環境もふくめて論じる。